

街の陰影—イランの道を行く

写真・文

エリック・レビシュタイナー

Eric Rechsteiner



チャードルに隠れた女性二人。タブリーズの街中にて

ヨーロッパからトルコ、イランを抜けてインド亜大陸までを結んだ道筋は、ヒッピーロードと呼ばれたりもする。六〇年代にヨーロッパの多くの若者がたどった道である。新しい精神性を求めた末にたどり着いた、母なるアジアの地での文化的「再発見」は時代を風靡し、その影響は日本の若者にも及んだものだ。

内に閉ざされた今日のイランから伝わってくる情報は僅かである。イスラム国家イランとしてはお決まりと言える映像、「アメリカに死を!」、「イスラエルに死を!」と異教徒に対して攻撃的なスローガンを掲げ、デモ行進する興奮した群衆、髭顔の過激派テロリスト、原理主義のモッラーの姿は記憶に残ってはいるものの、印象はそこ止まりのことが多い。

パキスタンに接するイラン南部は、人跡未踏の葵色の山々が連なる砂漠地帯である。ここでは旅行者が日本人であれ欧州人、あるいはアメリカ人であっても、もてなしのセンスが抜群の土地の人々に迎えられる。いつものお茶とナツメヤシの実を分かち合いながら、彼らはどのような良風が我々旅人をここまで運んできたのかを聞くのが嬉しそうなのだ。

ここで出会うのは興奮した群衆とは違い、むしろ太陽と阿片によりぐったりとしている人々である。実はザーヘダン周辺は、麻薬密売人の統制下にある。彼らはアフガニスタンとパキスタンから貴重な品を取り



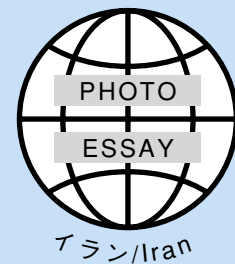
イスファハンにて。「金曜日」モスクと女性



壁に沿って滑るように通り過ぎて行く黒い影



ケルマーン地方にて。砂漠の風景



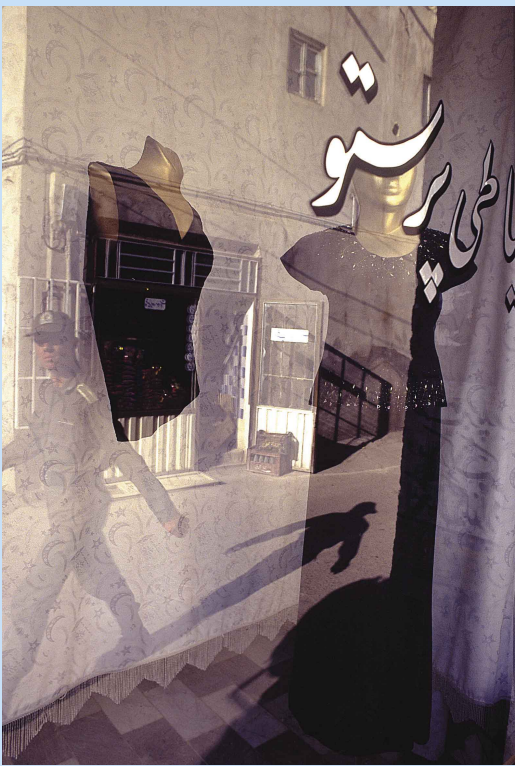
寄せては、それを欧州に送り出すだけではなく、国内の市場にも流している。三グラムのパキスタン製阿片がここでは一万リアル（二ドル）で手に入る。一九七九年に保守派の宗教勢力が政権について以来、国内では飲酒が禁止されており、若者にとってはウイスキーよりも阿片の入手の方が簡単なのであり、これに対して政府は、失業と経済的困難に喘ぐ国民の唯一のはけ口として目をつぶっている状態だ。

砂漠を通り抜ける道に人の気は稀である。行き来が途絶え、生命は枯れ果て、景色は、自ら終結する力を失ったかのように何処までも続いている。

南部の大都市ケルマーンでは、賑わう市場やモスクといった土製の見事な建造物が、立ちのぼる暑さに揺らめいて見える。そんな街中の乾ききった土色の壁に沿って、黒影が滑るように通り過ぎて行く。チャードルの下に隠れた女性達である。

ヤズドを抜け、ペルシャの偉大な芸術を崇めようと多くの外国人客が行き交うイスファハンに入る。街の大きなレストランで礼を言いながら何気なく差し出された西洋人女性客の手を前に、店の主人は当惑を隠せない。たとえそれが外国人であっても、公衆面前での女性との握手は店の評判を損ないかねないのである。

イランの人々はよくこう言う。「この国では、好きなように振る舞って良いが、彼らはお前を好きなようにできる。」彼らと



女性用衣類店の窓ガラスに映る街の様子



女子学生達。テヘランにて



イスファハンの大モスク「シャー・アッバース」。別名イマーム・モスク

も消え去る可能性が強い。

イラン北東部の大都市タブリーズは、アゼルバイジャン、トルコ、アルメニア、イラクに近接しており、その訛りの調子からしてペルシャ語よりトルコ語に近い方言を聞いて、テヘランとイスラム革命からは遠去かった気になる。とんでもない。ここは国一の保守派の街で、例えば女性は頭からつま先まで黒一色で覆われてないと大学に入れない。だが、気分任せて公園ですれ

街をさまようチャードルに隠れた女性達の黒影は直に、妄想のように取り付き、それに慣れることはできないまま国の印象全体がこのプリズムを通して変っていく。

首都テヘランではそれでも、西洋風カフェやお洒落なレストラン、上流階級が出入りする店など一部に限るとは言え、ジーンズに細く尖ったハイヒール姿で渋谷の若者のように化粧した若い女性とすれ違うことがある。けれども最近の大統領選で超保守派が選出されたことから、厳格な道徳規制への逆戻りが考えられ、この限られた自由

はモッラー、イスラム指導省、バシージュ
 命派防衛隊である。イラン女性は、女性蔑視の法の枠内での権利と制限とを熟知している。髪を覆い隠すこと、膝丈のチュニックの着用。これがこの国で女性に課される家の外で存在するための条件である。男性達の視線と欲望からその恥ずべき身体を隠すためという理由で。



喫茶中の二人。タブリーズにて



通りすがりの母と子。タブリーズにて



イラン国境付近にて。遠方にアララト山を望む

違った女性達と話をする。英会話の実践が嬉しそうに見える彼女達との数分の何のことはない会話が、若い青年達の激怒を買った。二人の女性が男性の外国人に話しかけているという光景が、彼らには我慢ならない。のしりが降り注ぎ脅しが入る。人も集まり警察と憲兵が近付いて来る。切迫した危険を感じて、本能的にタクシーの中へ逃げ込み我々はその場を去った…。この国を離れる時が来たのだろうか？

イラン―トルコ間を長距離バスがほぼ毎日運行している。タブリーズからエルズルムに至る国境付近では、アララト山がそびえ立つ世界で最も美しい山岳地帯を通って行く。長距離バスの乗客は大半が仕事でトルコへ向かう男性なのだが、見開かれた彼らの目が釘付けになっているのは実はテレビの画面であった。国境を越えて以来、バス内のテレビはトルコの女性流行歌手のビデオクリップを流していた。薄い衣装をまとい、ロックとオリエンタルの混じる流行のリズムに乗って腰をくねらせて踊り、青年達を興奮状態に導く。彼らは歓喜の声を上げて踊っており、口笛が鳴り交い、誰一人窓の外の圧倒的な景色の変化には気を留めもしない。無理はない。彼らはいややと女性の身体を気兼ねなく思いのまま眺められる時を得たのである。

(エリック・レビシユタイナー／写真家)